

日本農建 本國民築

国立保健医療科学院蔵書



10012209



QLD
4
4

農民建築の見方 (二)

— 稍々感想風に — 石 原 憲 治

私は前號に於て農民建築の見方の主要なる點を三つ掲げ、その内第一の實證的、實地的研究といふ事に就て述べておいたが、此の事柄は最も大切な點であつて、農民建築に關しては一般に常識的に考へられて居る事柄が意外にも不確なものが多いのである。自然科学の様な學問は、日進月歩の進歩に伴つて、一般に定説となつたものが普及して大衆に常識として受入れられるのである。例へば營養學でカロリー説が一時盛んであつたが今日は更にビタミンの研究が行はれて已に常識化せられ、一般に通用して居るのである。然るに、而かく科學的實證的研究によつて裏付けられて居らぬ學問の中でも殊に住家等の事柄となると、その常識といふものは極めて不確な知識でしかない場合が多いのである。誰れでも知つて居る様であつて、實は誰れも知らない場合が多いのである。此の事は更に今日の農村調査などにも云はれる事であつて、今日の農村家屋の事情が何一つ實證的に研究せられて居なかつた事は寧ろ不思議と云はねばならぬ。従來我國の農家の間取は田の字型から發達したものである様な傳説が信ぜられて居つたのであるが、私の研究によつて實際は此の様な簡單なものでない事が明になつて來た。此の事は漸次此の著述の中に明になつて來ると思ふ。私が傳説と云ふ文字を使つた

のは斯る實證的研究以前を指して云ふのである。

次に私は第二の綜合的觀察に基く事について述べ様と思ふ。是れは農家の研究は凡ゆる方面から考へ觀察しなくてはならぬと云ふ事である。藁屋根の形の變化や、所謂千木の有無や、破風の形など部分的には面白い事もあり、土俗的に見ても興味ある事であるが、是れと共に最も大切な事は間取の形式や、骨組ともなるべき構造の研究である。誰れにも入り易いのは屋根の形式や外觀の美しさなどであるが、是れも結構には相違ないが然し是れは農家の建築から見ると一部分の觀察に過ぎない。最も大切な事は外觀、間取、構造、宅地等、是れらの綜合的觀察に基いて、農家の建築を全體として認識する事である。部分的に見れば此外にも澤山興味ある附隨的問題がある事を私は知つて居る。是れは私の一生を費しても尙ほ足りない程の仕事があるのである。私は唯謙遜なる氣持で、何時果つとも思はれない此の未完成の仕事を勵むより外道がないのである。此の仕事がよし左から右に直ちに利用厚生に役だたなくとも、もつと長い世代の間には、何かより基本的な仕事として役に立つ事を私は信じて居るのである。私は靜かに此の仕事完成しなくてはならないと思つて居る。私は餘りに私の個人的感慨に深入りしたかも知れないが要は家を全體としてありのまゝに觀察することから始めなくてはならない。一例を挙げると、屋根に就て見るに、普通誰れも見様に見える外形の入母屋とか四注とか切妻とか、或は所謂千木などに就てその外觀を見るだけではいけない。どうして

もその屋根裏の構造をしらなくてはいけないのである。私
は時に煤だらけになつて居る屋根裏に入つてスケッチをする
のである、斯う云ふ事は今日迄疎にされて来ておつたので
あるが、わたしの研究の結果によれば屋根裏の構造は甚だ重
要な意義を持つて居る事が明になりつゝある。何れ是等に就
てもその折り折りに説明して行くつもりである。是れ迄も出
来る丈けその心懸をして来たつもりではあるが、今後に残さ
れた部分はその所々で説明することにしたいと思つて居る。
其他柱と梁、及び小屋組等の取り合せ方やその材料の扱方に
しても、地方地方で特色を持つて居る。是れらの種々の構造
は決して偶然にその地方地方に起つたものではなくて、歴史
的に古い關係があるのである。もつと廻れば古代からの關係
が発見されるかも知れないと思つて居る。形の發生的關係が
その間に自ら明になつて来るのである。是れらは自ら民族學
的研究と關聯して來ると思ふ。同時に人類學的研究とも大い
に關係を持つて居る事が明になつて來るのである。一般に
我國の農家は、殊に交通の不便な村落の人々は移住性が少な
く、土着性があるから、古い形式がそのまま保存されて居る
のである、其他名稱の上にも古い言葉や、地方的の方言が行
はれたり、又民間信仰が家屋と共に保存されておる。是等の
多角的研究を同時に進行させて行かねば決して正しい方法と
は云はれないのである。勿論所謂千木と云ふ様な問題のみを
取り揚げて研究することも一つの見方には相異ないが、此の
様な部分的な方法論は既に科學的基礎を全く持つて居ない事

をわたくしは信じて居るのである。此の意味に於て、土俗誌
的記録的方法にも貴重なるものがあることを認めるのである
が、是れのみには依る場合は多くは見方が部分的でその綜合的
系統的觀察が不充分である憾みがある。

わたしは地方的構造の事を述べたが、農民建築の美的觀察
を試みる爲めには、その骨格たる構造的特質を明にする事が
第一に必要なのである。旅行者の印象の一寸した面白さを地方的
特質でもあるかの様に述べたり、部分的の認識をさも全體的
の判斷であるかの如く性急に論じられたりするのを見受ける
事があるが、われわれはより多く忍耐を學ばねばならぬと思
つて居る。そして少しでも靜かに觀察したいと思ふのである。

「日本農民建築」に就いて

○ 増田 幸次郎氏

我々は現在新しい材料、新しい構造を持つてゐながらも、その眞の
日本的な形式の模索に、随分頭を悩まされてゐるのである。此の困難
な、そして緊急な問題の解決の爲には、そうした資料の乏しい現在の
状態としては、此の農民建築の全国的に統括した研究が齎す貢獻は多
大なものだらうと思へる。

だが事實今まで、此の問題の非常に廣範圍に渡ることや、その地方
的な獨自性や、材料の不統一やに災されて概括的な研究書は殆んど無
かつたと云へるくらゐであつた。今石原氏の廿年間の努力になる「日
本農民建築」を拜見して以上の嘆を最早撤廢してもよいのでは無いか

農村住居問題の考察 (一)

四月三十日の讀賣新聞に前總理大臣、齋藤實子爵は「農村
對策の根本問題」として九州、關西、近畿方面の農漁山村の自
力更生状況を認め、更に東北六縣の冷僻地方にも學術的に研
究を得た上その結果に基づいて夫々根本的な對策を講じること
は刻下の急務であると云ひ、更に次の如く述べて居られる。

「東北六縣は他の地方とは異り、山間の僻村は生活上にも非
常に程度が低いのであるから、農村の自力更生とか、副業の
奨励とかいつたところで、第一にその生活状態を一般農村程
度、いはゞ普通に云ふところの人間並みの生活程度にまで引
上げてやるのでなければこれらの農村を自力更生の域に達せ
しめることは甚だ困難だと思ふ。生活程度の低い農民は戸障
子のない家に住み、寒い時は藁の中にもぐり込んで寒さを凌
ぐといつた按配であるから、これを第一に改善し、寒冷を凌
いで完全に家の中で仕事の出来るやうな住居を造つてやる必
要がある。石黒岩手縣知事はこの農民の住居問題に留意し、
最少の金額で寒冷の凌げる理想に近い住居を設計して見た
が、それでも大體的百圓位の費用を要すると云ふことであつ
た。然しこの百圓程度の經費を目下のところでは支出出来な
い有様なので、最近別に團體を組織してそんな金が支出出来
る様な方法を講じやうと考へて努力してゐる。

農民の住居が改善され、生活の向上が出来れば副業獎勵な
ども出来るやうになり、經濟的にも自然更生の途を辿り得る

と私は思ふ。
芥澤氏の簡素な装幀といひ、挿入された圖版の藝術的な、而も要點
をつかんだ撮影といひ、著者の心づくしのこめれる詳細な解説と俟つ
て、跨るべき傳統を持つて我等の祖先の遺産を記録し、同時に明日の
日本建築が持つ幾多の懸案を示唆する好文獻であることは、疑ひもな
い所である。

たゞ、私として希望することは、解説に於て各府縣の概観にそへて
是非、その地理的な分布の狀態の略圖といつたものが讀者の爲に、是
非欲しいものである。

さうすることによつて、より一層、これらの建築様式の地方的な特
徴と云つたものが、歴史的にも、地理的にも、概括的にも、はつきり
と浮び上つて來るのではないだらうか。

その他に、この様な研究として、今少し著者の批判を加へてゆかれ
ても、決して研究材料の正しい姿を傷つけるものではないと思はれる。

○ 江口 武夫氏

石原憲治氏著「日本農民建築」誠を得難き貴重なる資料を豊富に蒐
集せられたる事、鮮明なる圖版、適切な解説共に著者の御努力と貴
社の御盡力とを感謝して拜讀致して居ります。

欲を申せば、農家々屋のプランのみならず其他の農家建築物のプラン
並に其等の宅地内に於ける配置狀態等に就きても、少し數多く蒐録
され度きものと存じます。尙ほ圖版は腰が堅くて開閉の具合安定なら
ず、故に圖版を開きたる場合机上にて自然に安定し得る如き製本なら
ん事を希望致します。忘言多附

であらう。」

此の様な國民生活狀況の實狀に基いて政治家が「眞剣に考察する必要」を述べられた事は國民として喜ばしい事であると思ふ。一般に農村問題といへば産業方面、生産生活の方面が主になつて、消費生活、殊に住家の問題など全然考へられて居なかつたのであるが、斯ういふ時に齋藤子爵が國策としての重要性を表明せられた事は斯る問題に關心を持つ者にとつて默過する事の出来ぬ事であると思ふ。

爾つて我國農村住家の現狀を見ると、是れは單に東北六縣のみの問題でない事が明である。今日我國農村の住宅生活は、明治初年の状態から餘り變つて居ないものが可なり多數見られるのである。従つて農村の生活状態は極めて低く、都會の文化と餘りに距離が出来過ぎて居る結果、農村の消費生活統計等を見れば第一生活費に属すべき飲食、被服、光熱費がその六〇乃至六五%を占め、残りの部分が第二生活費に属すべき諸掛りに當てられて居るのであるが、第一生活費の内三分の二は飲食費に消費されて、光熱費の外に純粹に住宅費と云ふものは計上され得ないものが多いのである。是は農村の住家は未だ自給自足の状態にあつて、多くは古家などを安く買つて来て是を建て直したものが多く、新築するものは相當金の纏つた階級でなくては先づ不可能な事情にある。従つて一度古家を買つて建て直したが最後、何年たつても是を改築する事も出来なければ、改造も出来ないのである。従つて腐朽のまゝに放任されつゝあるものが多い。尤も養蠶の

行はれる地方は通氣を良くする爲に家の内部の壁を取り除いて戸障子を建てたり、棟の上に箱棟を取り付たりして居るが、養蠶の盛んに行はれぬ地方は未だに壁で塗り込めた寝間がある家が多いのである。又建具はあつても名計りで、破れ障子と破れ壁なら未だしも、到る處隙間だらけで、私共都會の者から見るとよくも辛抱出来ると思ふ位である。ましてや採光の悪い位の事は普通である。又養蠶の時期の農家は、家全體が養蠶の爲めに使用せられて、家族の眠る場所もない様な状態である。

東北六縣は我國でも殊に文化が後れて居る事は事實であり、農業經營と共に住家も一般に發達して居らぬのであるが、中部地方以北は一般に悪い家が多く、全國的に見て山間部は平地部より劣つて居るものが多い。

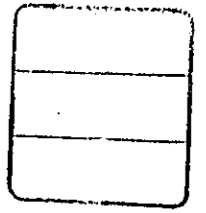
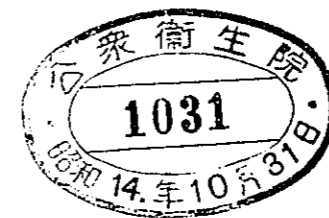
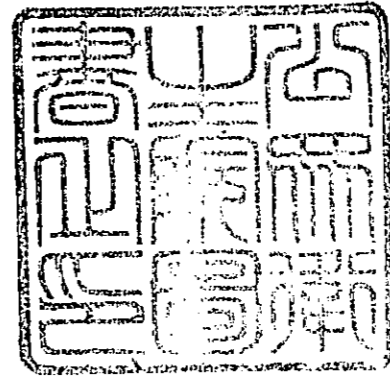
又是を他方、家族制度の上から見ると、中部以北の農村には特に老人夫婦と、若夫婦の同居が多いが、關西から四國、九州と南方の海岸地方に行くに従つて外國の風習が盛んであつて、老人夫婦は、若夫婦に母屋を譲つて別に離れ、又は納屋の一隅に設けた一室に起居するのである。それで是等の地方に行くに必ず別棟の家が見られるのであるが、中部地方から更に東北地方に行くに大きな母屋の中に老若夫婦は勿論牛馬迄も同じ様に中に住むものが多い。關西地方でも山地に入ると今日でも既にニワの先に見られるものがあるが、是れは今日は急激に減少して別棟納屋と便所を設ける様になりつゝある。……以下次號……(石原)

石原憲治
日本農民建築

第四輯



聚樂社刊



內容目次

圖版目次

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
本屋前 景	本屋前 景	本屋前 景	正門	聚落景 觀	本屋前 景	本屋前 景	牛舎及 蠶室	本屋前 景	聚落景 觀	同上 内部	本屋前 景	座敷内 部	座敷内 部	本屋前 面	本屋前 景
	(島根縣通摩郡湯里村山根孝太郎氏)	(島根縣簸川郡高濱村太田祐次郎氏)	(同 上)	(島根縣簸川郡杵築町千家宗統氏)	(島根縣西伯郡五千石町湯原惠喜藏氏)	(島根縣西伯郡五千石町)	(同 上)	(島根縣東伯郡小鴨村水谷庄藏氏)	(島根縣八頭郡智頭町)	(同 上)	(島根縣八頭郡智頭町前川重兵衛氏)	(島根縣八頭郡智頭町谷口銀藏氏)	(同 上)	(同 上)	(島根縣八頭郡智頭町西尾熊太郎氏)

24	23	22	21	20	19	18	17
ニ ヲ 上 部	本屋前 景	本屋前 景	宅地全 景	聚落景 觀	屋根小屋 組	本屋前 景	本屋側 面
(同 上)	(山口縣玖珂郡新庄村小田栄太郎氏)	(山口縣玖珂郡新庄村弘友太郎氏)	(山口縣阿武郡篠生村福永耕吉氏)	(山口縣阿武郡篠生村)	(同 上)	(島根縣通摩郡湯里村林富太郎氏)	(同 上)

解説目次

中國地方の概観	一
鳥取縣下の概観	七
圖版説明	九
島根縣下の概観	一七
圖版説明	二二
山口縣下の概観	二九
圖版説明	三三

中國地方の概観

中國地方の農家の建築は一般に平明な形式を持つて居る。私は是を西方型と呼ぶ事にして居るが、その主なる間取の形式は整型に属するものが最も多數を占め、他の地方に比し餘程明瞭な特質を示して居る。此の間取は 10×10 の四間取、 8×8 の六間取の如く、何れも間口が廣く奥行二室の淺い間取が最も多く、是に次いで奥行三室間口二室の 8×8 の六室、 8×6 の九室、 8×4 の十二室などの大きな間取のものも見られるが、是等は極めて少數である。

整型の間取に次いで喰違型の間取と、原型の單純な間取が少數存在して居るが、其内で喰違型に属するものは是を縦の喰違に属するものと、横の喰違に属するものとに分ける事が出来る。縦の喰違と云ふのは四室の間取の家で、上手前の座敷と、下手後の臺所と斜の隅にある二室が廣くなつて、一多くの場合は六疊位の廣さになつて居る—上手後の寢間と、下手前の居間が狭くなつて居るものである。その爲めに仕切が喰違つて、前面から見ると奥行に縦の仕切が通つて左右の横の仕切が喰違つて居るものである。岡山附近で手違ひ六疊と云つて居るのは是である。この様な形式は可成古い間取を傳へて居るものと思はれる。中國地方では兵庫、岡山、鳥取縣に多く、又四國では徳島、高知、愛媛縣等に、其他近畿地方から静岡まで分布して居るものである。

是に對して横の喰違型と稱するものは、奥行二室の間取の前後の仕切が横に眞直に通つて、縦即ち奥行の仕切が前後に喰違つたものであるが、中國地方では、廣島、山口並に兵庫縣の淡路島等及び其他近畿地方に分布して居るが、是は山陰地方には殆んど實例がない。

原型に属するものは殆んど各府縣に少數づゝ分布して居るが、此の形式は兵庫縣では北部の但馬地方から、山陰の因幡、伯耆及び岡山縣の美作等の地方に最も多く、其他廣島縣にも少數見られる。更に西部の島根及び山口縣となると極めて稀にしか見られない。此の様に昔から一般に交通の不便な山地の部落に多く存して居るのは、此の地方に昔の形式が、其の儘保存されて居るが爲めである。是等は上手には後に納戸があつて、その前に座敷があり、下手には全室の臺所があるもので此の間取は凡らく我國の農民建築の中で最も古い、最も原始的な間取を示して居るものである。

る。そして喰違型も整型も共に此の間取から發達したものであらうと思はれる。是は單なる想像ではなくて、是等の間取の關係を仔細に調べると益々明かになつて來るのである。整型四間取は支那大陸文化の傳來と共にその影響を受けて發達したものであらう。

三室の原型は但馬地方では上手に寢間とデイがあり、その下手に廣いオエの間があるが、因幡地方では納戸とデイ及び廣間又は座敷などと呼んで居る。此のオエ又は廣間等と呼ぶ全室を前後に仕切ると四室の縦喰違又は整型の四間取となるのであるが、此の内喰違の間取は四國篇でも説明して置いた通りに東は静岡、愛知から西は岡山縣地方に迄分布し更に四國の徳島、愛媛、高知地方に迄分布して居るもので、可なり古い形式を傳へて居るものと考へられるのである。中國地方で此の間取の最も多いのは因幡、伯耆で、是に次いで岡山縣でも北の美作等何れも原型間取の分布して居る所には此の間取が最も多く存して居る。是れらの原型及び喰違の間取は何れも上手の納戸又は寢間と、その前のデイとの界が壁で仕切られて居る事が特徴であるが、是れは整型四間取でも古い家はやはり壁で仕切られて居る。此の事は四間取が同じく原型から發達した事を證する一つの證據となるものであると思ふ。此の様な整型四間取の最も著しく現存して居るのは島根縣出雲地方であるが、此の外出雲に隣つた廣島縣及び岡山縣の山間部地方にも比較的多く見られるのである。四國では愛媛、徳島縣にもかなり残つて居るのである。

此の事實は出雲の神社造の間取との間に一味相通するものがある事を思はせないでは置かないものがある。即ち農家の方ではニワを除いて考へると大黒柱から上手の床の張つてある室の部分を、原型の間取と比較すると極めて興味ある事實を發見するのである。即ち神社造りでは二間二面の正方形の平面で、その中央に心の御柱が建ち、その一方に前後に仕切があることである。是れは原型三室の、仕切壁の位置と全く符合するものであつて、心の御柱は原型の場合には中柱に相當し、従つて大黒柱は此の場合普通常識的に考へられて居る様に心の御柱に相當するものではないのである。そして又普通我國の建築史家の内に通説とされて居る如く田字型の間取と神社造りとを比較すべきでなく

て原型の間取と比較してその壁の位置に注意しなくてはならないのである。その他の仕切は何れも戸障子であつて、仕切壁ではないのである。此の際はれらの戸障子の仕切と壁の仕切との間に、重大なる意味が存して居る事を注意すべきである。

私は此處に間取の上に於ける——然かも農家の床張の部分に就て——一致點を比較したに止まり、直ちに兩者が同一であると云ふのでもなく、又従つて、神社造りから直ちに今日の農家の間取に發達したものであると結論することも暫く留保して置き度いと思ふ。何故ならば、今日の農家の間取と構造とを全體として考察する場合、第一、その土間と床張との結合された間取の問題があり、第二、農家の床張の部分に就て見るに、神社の床下の高床造りと、農家の大壁で圍らされた外壁の構造の比較の問題があり、第三、屋根とその小屋の構造に於て全く異なるものがある。是れらの問題の探究を放棄して、直ちに素朴なる結論に走る事は暫く留保したいと思ふ。

凡らく事實は我國先住民の文化の上に、大和民族の文化が移入し、更に是れに支那大陸から漢民族の文化が傳承して、是れらの文化の複合せる結果によつて、始めて此の地方の農民建築が成立したものと解すべきではないかと思ふ。然し今後他の地方の系統を説明する際に更に此の問題に觸れつゝ是れらの問題の核心に觸れて行き度いと思ふ。

一般に納戸は古い形式のものは前の座敷—デイとも云ふ—との仕切を壁にしたものが多いが、新しいものになると是を襖の類で仕切つてある。座敷は前述の様に上手前に取つてあるのが普通で、他の地方の系統に見られる所謂鍵座敷の形式である、前座敷と、奥座敷又は上段の間を奥行に配列する様な例は見られないのである。従つて床の間は一般に妻床が多いが、然し後の納戸の仕切壁に接してその前面に床を竝べた平床の例も見られる。この場合には二方に廻り縁を設けて開放的な座敷となつて居る。

土間をニワと云ひ、ニワと臺所との間には大黒柱があり、前述の如く臺所の上手には中柱がある。従つて大黒柱は床張の室の中央にあるのではなくてその端の方に位して中柱が中央にある事になつて居るのである。

庵は最も古い形のもは大黒柱の後のニワの上り端に、土の上から築き上げて設け、且つ焚口が床の方を向いて居るが、稍々新しくなると庵をニワの中央に竝べたものが多くなつて居る。流しも同様最も古いものは上り端の板場に設けるのであるが、稍々新しくなるとニワの後壁に接して格子窓の下に設ける様になる。又裏に下屋を出して其處に釜屋を設けたものも見られる。兵庫縣から岡山、鳥取縣の山間部地方にかけてはニワの前側に厩を設けたものもあるが、広島、山口縣地方では今日母家の中に厩を設けたものは殆んど見られなくなつて、昔厩のあつた所を部屋又は物置などに使用し、厩は別棟の納屋の内に設けたものが多い。屋根は山間部では茅葺又は藁葺が多く、或ものは其の廻りに瓦葺の庇を廻らして所謂鐵葺をなして居るが、平地の鐵道沿線になるほど漸次瓦葺が多くなつて居る。葛屋は東部岡山の方は入母屋が多いが、西方の広島、山口地方になるほど破風が小さくなり且つ四注が多くなつて居る。

葛屋根の棟の木の抑へは近畿地方に近い地方は多く立派なものが見られるが、一般的に觀察して、西方になるに随つて小さくなり、終に無くなつて居る。兵庫縣には全縣に殆んど見られるが、岡山縣下では山間部に大きなものが見られ、海岸地方になると見られぬ。広島縣は更に少くなり、山口縣も同様である。広島縣と山口縣との境に近い山間部に僅に見られる位である。鳥取縣には東部の山間部に見られる位で中部以西には見られぬ。鳥根縣にも稀である。山陰地方で特色あるものは褐色釉の瓦葺屋根である。是は城崎から西に入ると急に現れて來る。鳥取縣下及び鳥根縣下の平坦地方に最も多く次いで岡山縣、広島縣の北部及び、山口縣の東北部に多く分布して居る。是は石見國長濱附近の産で普通是を赤瓦、油瓦又は石州瓦等と呼んで居る。

敷地は多く南面し、本屋を中心として、前にカドがあり、カドの前に入口の門がある。或はこの門に長屋門を設けて是に厩、物置などを設けたものもある。又敷地の東の方に納屋、物置等を取り、西北隅に所謂乾倉イシイラを設けるのが普通である。

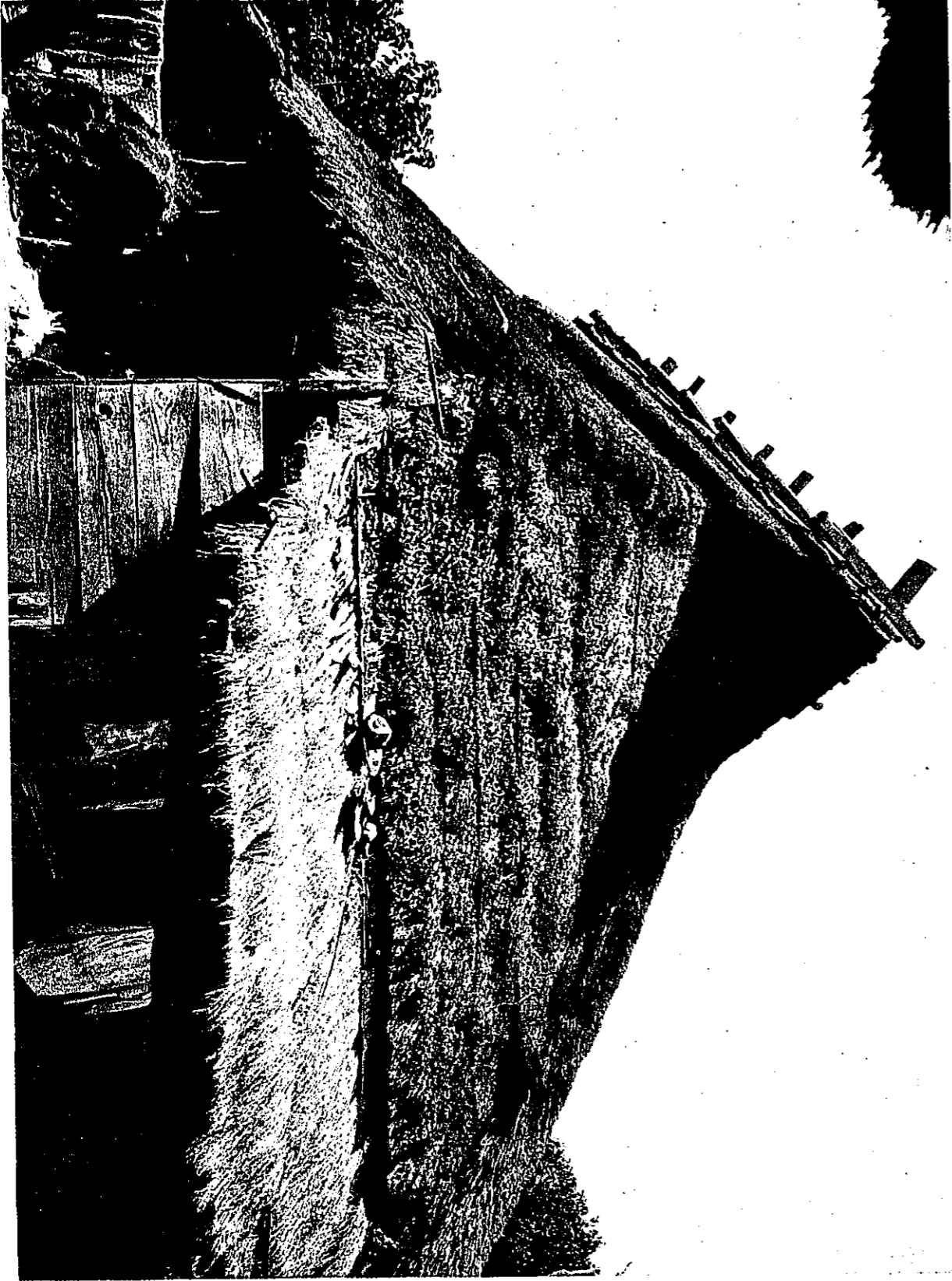
家の間取を見るにニワを東に、座敷を西に配置し従つて庭園を西南隅に設けるのが一般の習慣になつて居る。

屋根の構造を見るに葛屋の一般の構造は、前後共側壁に沿つて柱の上に桁を渡し、是に前後に梁を架け渡し、その兩端から斜にサスを立て懸けたものである。此の構造は東のないもので是は全國的に同じ方法であるが、此の外に葛屋にして梁の上に束を立て、棟を支へるものも相當に見られるのである。是は近畿地方にも所々に見られるが、兵庫縣、岡山縣、山口縣等にも少數見られる。然し中國地方では近畿地方に見られるほど特異な構造は見られない様である。

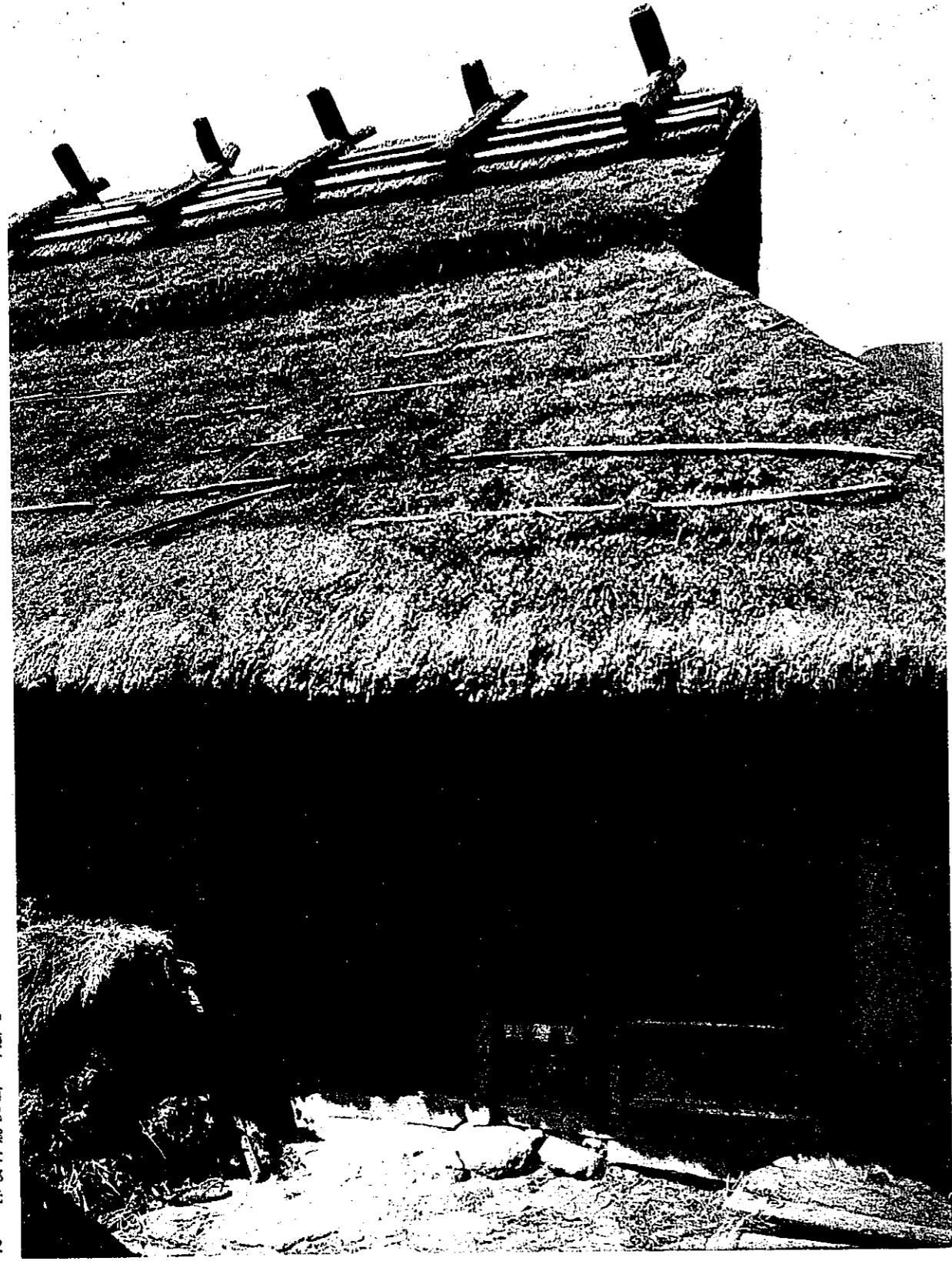
一般に草葺の葛屋根は束を立てぬものが普通で、是は凡らく我々の先住民時代より遺存したものと考へられるが、東の立つたものは支那大陸文化の輸入に伴つて瓦屋根に用ゐられた構造法が草葺屋根にも採用せられたものではないかと思ふ。此の様な屋根は束と貫によつて組み立てるものである。それは我國の古い寺院建築例へば法隆寺以降の多くの建物の構造と比較して見ると明かである。

今一つ異つた構造は束を用ひずして、柱を直ちに棟迄立ち上げる構造である。是は他の縣の場合に説明する事にして茲には述べない事にする。

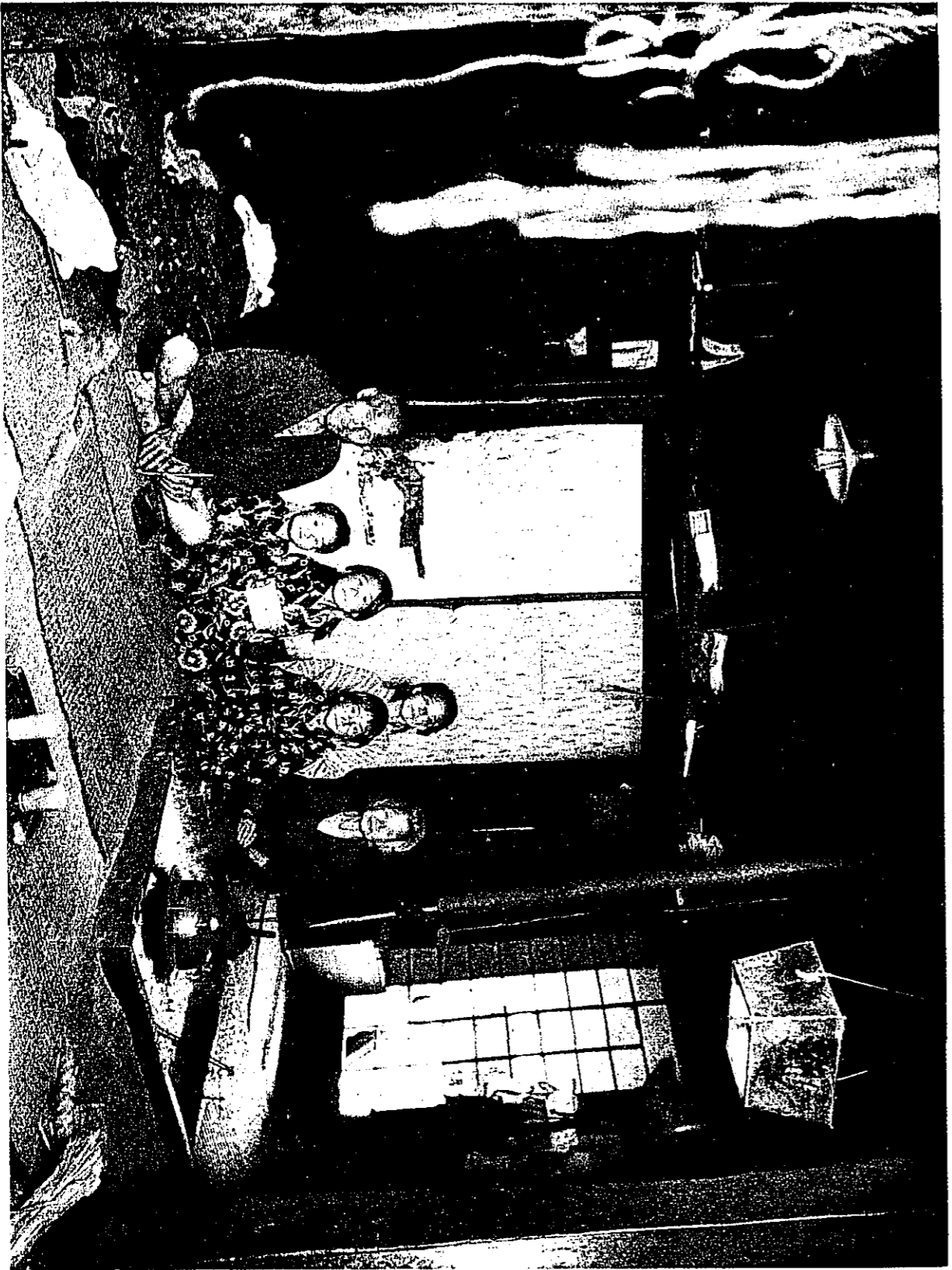
鳥取縣



1 智頭町 西尾熊太郎氏



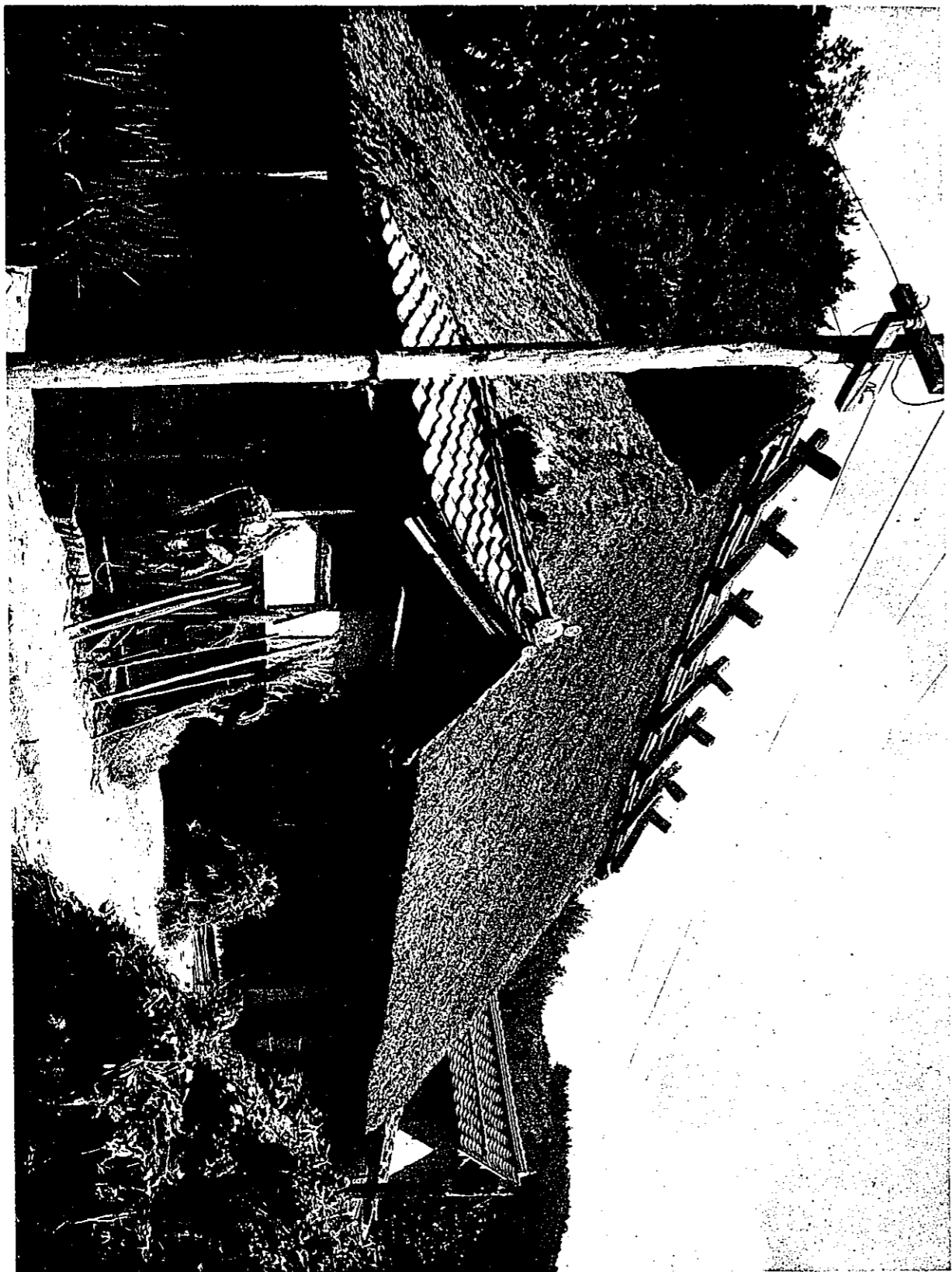
智頭町 西尾熊太郎氏



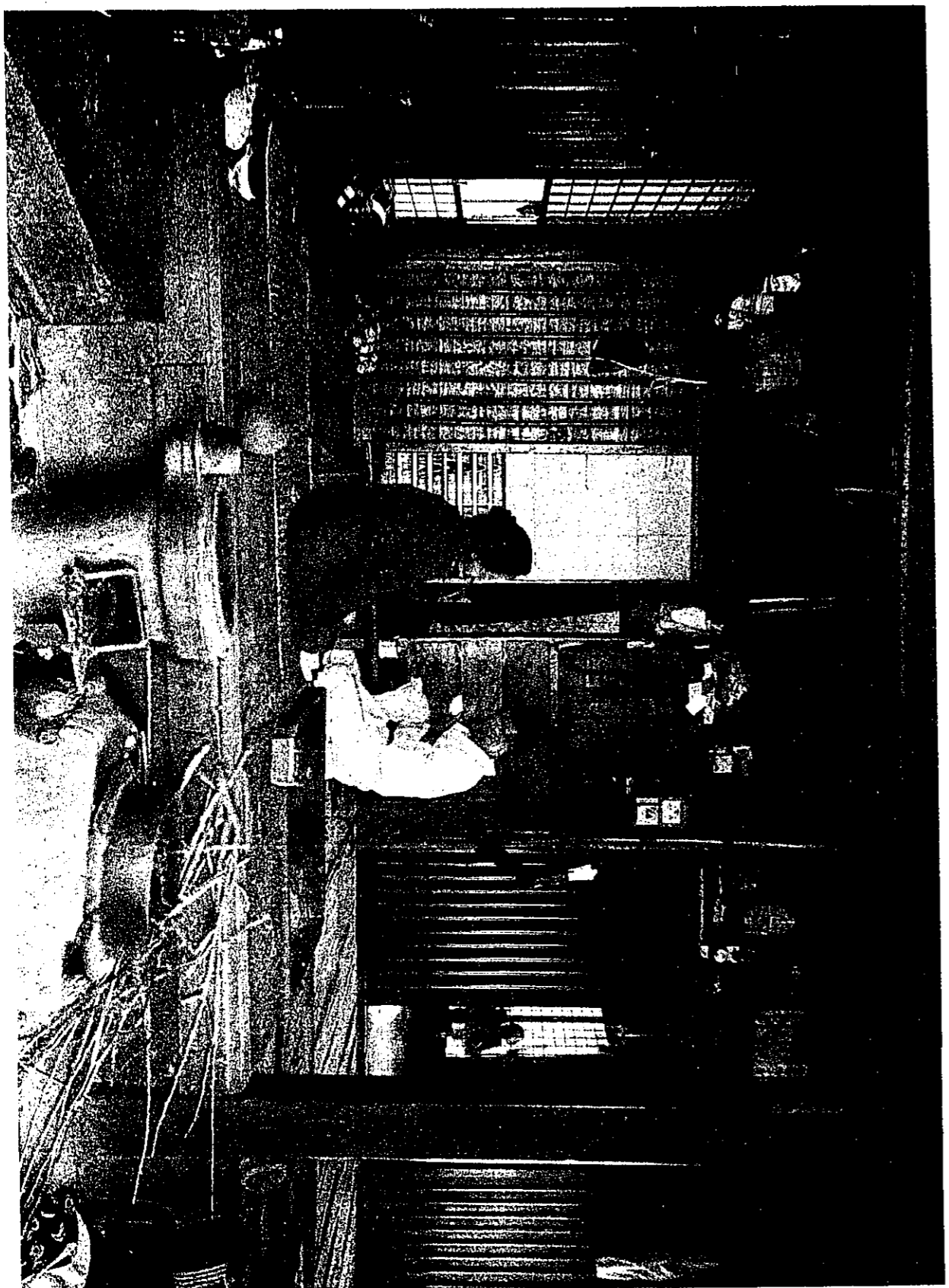
3 智頭町 西尾雄太郎氏



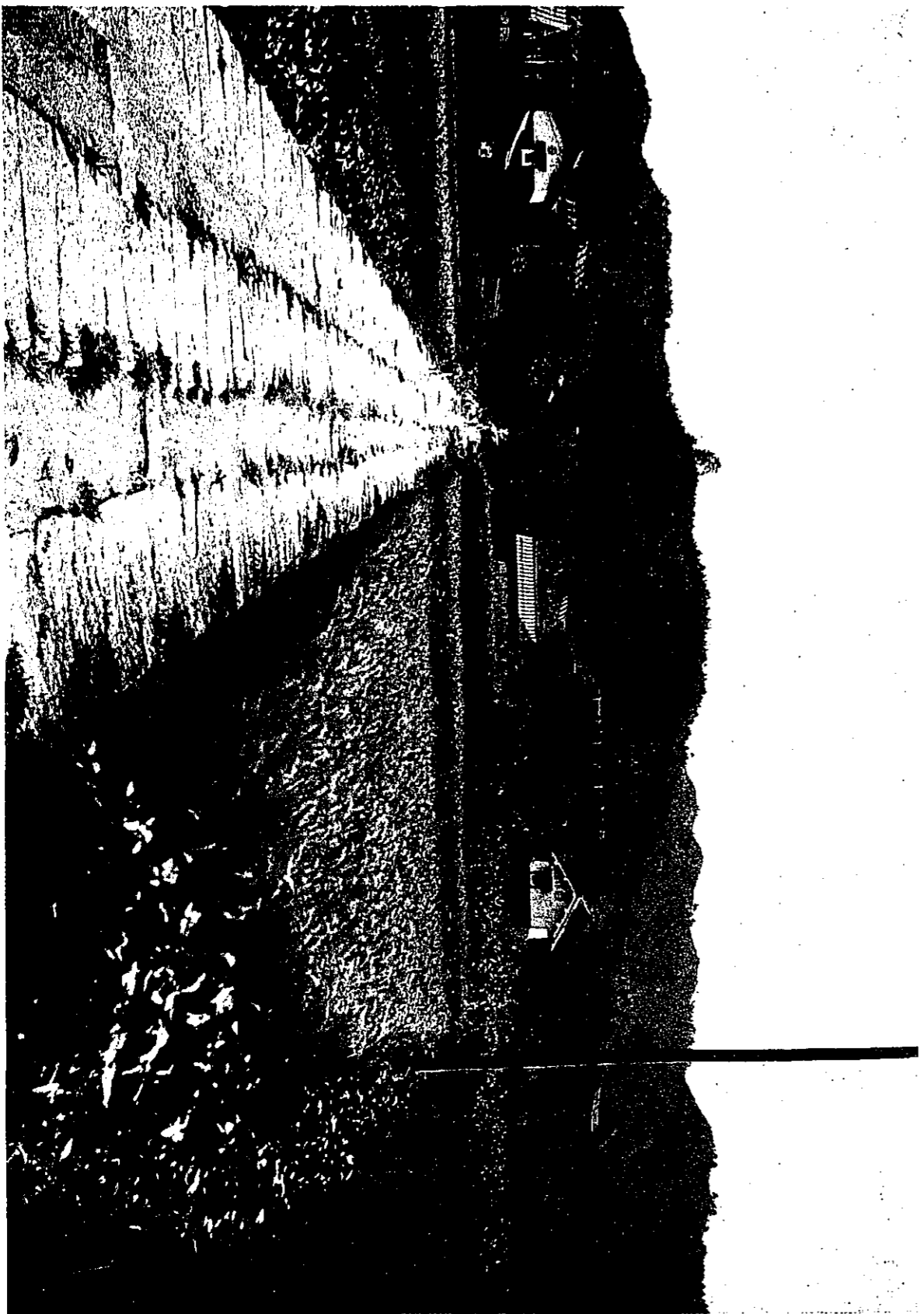
智頭町 谷口銀藏氏 4



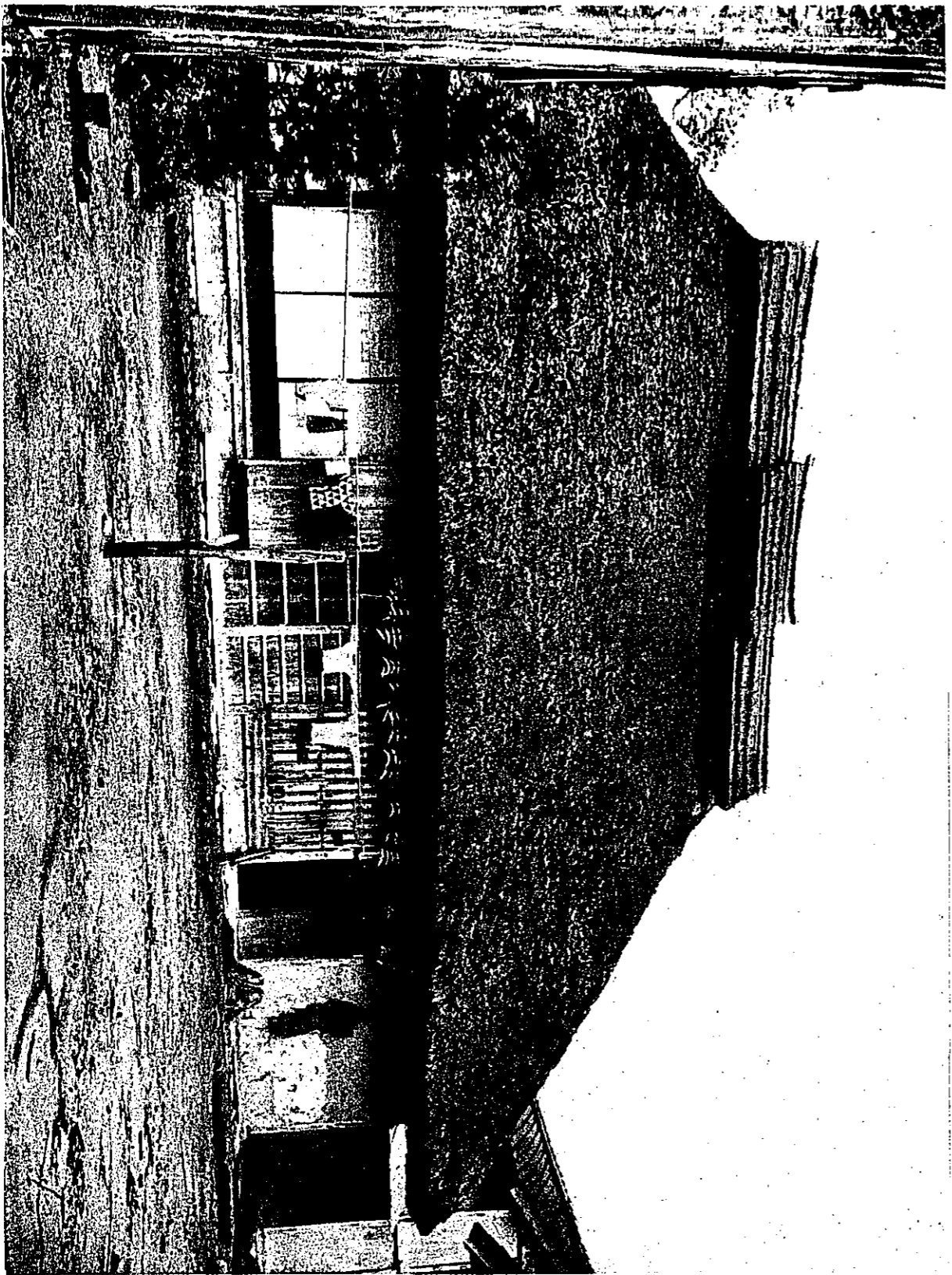
5 智頭町 前川重兵衛氏



智頭町 前川重兵衛氏 6



7 御頭町 家落景観



小助村 水谷正藏氏 8